

||||| ピアノ調律師より |||||

オトトビラ

OTONO TOBIRA

Vol.7

巻頭特集

Featured Article

習い事は。ピアノだけでよい
今の時代こそ。ピアノ稽古を

人間性脳科学研究所・所長 武蔵野学院大学 大学院教授

さわぐち としゆき
澤口 俊之



特集 巻頭



習い事はピアノだけでよい

今の時代こそピアノ稽古を

人間性脳科学研究所・所長 武蔵野学院大学・大学院教授

澤さわ口ぐち
俊とし之ゆき



Profile

- 1959(昭和34)年 2月 東京都葛飾区生まれ。
- 1982(昭和57)年 3月 北海道大学理学部生物学科 卒業、
4月 京都大学大学院理学研究科 修士課程 入学
- 1984(昭和59)年 3月 同修士課程 修了
- 1984(昭和59)年 4月 京都大学大学院理学研究科博士後期過程 進学
- 1987(昭和62)年 3月 同博士後期過程 修了
- 1988(昭和63)年 4月 米国エール大学医学部神経生物学科ポスドクとして赴任
- 1991(平成3)年 4月 京都大学霊長類研究所に助手として赴任。
- 1996(平成8)年 3月 北海道大学文学部心理システム科学講座に助教授
- 1999(平成11)年10月 北海道大学 大学院 医学研究科教授
- 2006(平成18)年 4月 人間性脳科学研究所・所長
- 2011(平成23)年10月 武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部教授兼任
- 2012(平成24)年 4月 同大学院教授兼任

専門は神経科学、認知神経科学、社会心理学、進化生態学。理学博士。
近年は乳幼児から高齢者の幅広い年齢層の脳の育成を目指す新学問分野
「脳育成学」を創設・発展させている。

著書に「幼児教育と脳」「学力と社会力を伸ばす脳教育」「夢をかなえる脳」
「発達障害の改善と予防」など多数。最新の著書に「老いは脳科学的に素晴らしい〜年をとるほど実力は伸びる」「仕事力が劇的に上がる脳の習慣」がある。
フジテレビ「ホンマでっか!? TV」NHK「所さん!大変ですよ」等、TV番組にも出演。

今の日本では、半数以上の子どもが何らかの習い事をしています。ただ、子どもを賢く将来的にも優秀な(例えば、高学歴で社会経済的地位が高い)成人になるように育てたいなら、習い事はほぼ無意味です。無意味どころか、脳の発達に悪影響を及ぼしかねない習い事もあります。ただし、多数ある習い事の中でも、ピアノ・稽古を除いては、です(他にもありますが、ごく少数ですし、ピアノには到底適いません)。

ここでは、学業や仕事、結婚、健康、寿命などに代表される人生イベント・プロセスにとって重要な高次脳機能群を問題にしています。簡単に言えば「知能」ですね。知能の本質は、将来的な環境を含めた環境への適応力ですから、生誕後から環境に適応すべく右肩上がりです。どんどん向上します。そして、知能が高くなれば、上記のような人生イベント・プロセスが良好になり、幸福感やQOL(生活・人生の質)も高くなります。

幼少期での知能向上は自発的なもので

す。子どもは自分が産まれた未知な環境をあれこれ自発的に探索したり、友人と自発的に相互作用したりすることで、知能を伸ばそうとします。これは、身体運動として適応に重要な歩くこと(歩行)や走ること(走行)を自発的に行なうのと同様です。そして、自発的な身体運動(特に走行)で脳が発達し、脳が発達するので身体運動も良くなる、という相互作用があります。この相互作用で知能も学力も向上します。



幼少期で今述べたような要素・行為が組み合わさっているのが「遊び」です。子どもが自発的に遊ぶことには知能向上という意味があつて、幼少期での遊びは成人以降での人生に大きく影響します。端的に、就学前に自発的にたくさん遊ぶと難関大学に合格する確率が2倍近く高まるという、日本での有名な調査研究があります。

知能や脳機能向上には多くの方法があると思われがちですが、科学的に信頼性が高くなり高いのは、幼少期では遊び(走行を含む)くらいしかないんです。小学校以降や成人では、遊びの主要要素である身体運動(特に走行)です。こうした営為・方法と同等かそれ以上の科学的方法は(脳トレ・認知訓練を含め)ほとんど見つかっていません。

ただし、原理は以前から分かっています、それは「進化的な環境や営為」です。人類進化において適応力としての知能や脳の発達を促した環境や営為が大きな意味をもつ、というのは当然すぎることです。

そして、幼少期での自発的な遊びや走行が進化的な営為であることは、いわずもがなでしょう

一方、ほとんどの習い事は進化的な方法・営為ではありませんから、知能や脳の発達に無意味なワケです。一見良さそうな水泳にしても、非進化的なので、やはり無意味です。もちろん、「水泳というスキルを身に着ける」という意味はありますし、何らかのスキルを身に着けるための習い事は他にもあります。しかし、知能の向上にはほぼ無意味です。場合によっては、特定のスキルを伸ばすことで、そのスキル用の神経システムが過度に発達してしまい、脳の全体的で良好な発達に阻害されてしまいます。「訓練的な習い事」は概して無意味か悪影響、ということですね。

ちなみに、0〜6歳を「黄金期」と称して幼児英語教育をするなどというトンデモノイ習い事もあります。第二言語の習得に黄金期（臨界期）などないことは、脳科学的には常識の範疇です。幼児英語教育ではスキルもほぼ身に着けられないの

で、この点でも無意味です。それどころか、場合によっては悪影響です。特に、スマホやタブレット、あるいはTVなどを使った方法が問題です。

スマホやタブレット、TVを研究的には「スクリーン」と言うことが多いですが、英語教育に限らず、幼少期でのスクリーンの使い過ぎは脳の発達を大きく阻害し「情動行動障害（EBD；各種発達障害的な症状が合併したような障害）」を引き起こします。習い事で散見される知育的コンテンツもダメです。子どもは一切使わない、使うとしても1時間未満にしろ、というのが科学的なコンセンサスで、WHOも同様なガイドラインを提示しています。

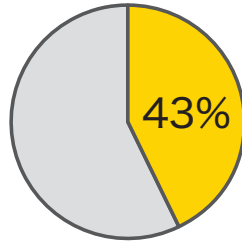


で、ピアノ稽古です。あえて、ピアノ以外の話を（かなり長く）してきたのは、多くの習い事の無意味さや悪影響を示すことで、ピアノ稽古の秀逸さが際立つからです（スクリーンとは無縁ですし）。

楽器演奏は、ちょうど遊びや走ることと同じように、進化的なもので、楽器があれば子どもは自発的に弾こうとします。両手の協調運動も人類進化の過程で発達しつつ適応に大きな役割を演じてきました。なので、両手を協調的かつ高度に使うピアノ稽古が知能や脳の発達に格段に良いのは当然なことと言えます。向上する知能は、ここで述べてきた人生に重要な知能（高次脳機能群）なので、ピアノ稽古は学業や仕事、結婚、健康、寿命などの人生的イベント・プロセスに好影響をもたらします。

学業に限っても、スポーツや数学を含むほぼ全ての科目がピアノ稽古で向上します。言語力（読解力やスピーチ力、語彙力など）も相当に向上しますから、国語のみならず、英語習得でもピアノ稽古は効

果的ですが。東大や早稲田大学などの難関大学に合格した学生の43%が幼少期にピアノ稽古をしていた、という調査データは理に適っています。



念のため言えば、「両親の学歴や子ども
の知能が高いので、ピアノ稽古」という関
係ではなく「ピアノ稽古によって知能や
学力が高まる」という因果関係がありま
す。このことは、ピアノ稽古をするほど
脳構造が変化するということから明らか
ですし、この点でもピアノ稽古は秀逸
です。

ピアノ稽古によって変化・発達する脳
構造は「知能の脳内中枢」を含めて多数あ
りますが、研究的な代表例は、高度な言語
を担う神経システム、左右脳をつなぐ脳
梁、あるいは小脳などです。ちなみに、小
脳の大きな役割の一つは情報処理の高速
化なので、ピアノ演奏で思考速度などが
速くなります。頭の回転が速くなる、と
いうことですね。

こうした脳の構造変化は長期的なもの
ですから、幼少期に数年ほど稽古しただ
けで、その好影響は生涯続きます。幼少
期でなくても、高齢期でのわずか4か月の
ピアノ稽古で、認知機能や視覚・運動機
能が高まり、QOLが改善します。

少子高齢化は進む一方です。子どもた
ちを優秀にし、高齢者の認知機能や心身
の健康を向上させるピアノ稽古は、今後
の時代にこそ重要だと言えます。是非と
もピアノ稽古をして下さい(くだいですが、
他の習い事はほぼ無意味です)。



特別 寄稿

よいピアノを求めてきた人々の群像

歴史研究の対象としてのピアノ産業、そして河合小市

一橋大学大学院 言語社会研究科・教授

小岩 信治

音楽学・音楽文化の研究者として大学に所属していると、マスメディアから取材依頼が届きます。先日は有名なバラエティ番組のスタッフから、「ベートーヴェンが有名な肖像画で不機嫌に見えるのは、その日朝食べたマカロニ・チーズが焦げて不満だったからか。」という内容の企画について電話がありました。企画の根拠は、インターネットに散在する「ネタ」で、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）に関する証言と、誤った情報を後世に大量に拡散したアントン・シンドラ（1795-1864）に由来する情報が、おそらく日本で混濁して生まれたデマです。けれどもそれが取るに足らない偽情報だ、つまり「ない」ことだと証明するために

は、多大な労力が必要です。研究者は（大部分は）まじめなので、「シンドラは信頼できないが、そんなことがなかったとは言えない」となどと誠実に答えようとはしますが、そうしたら最後、デマは「諸説あり」に昇格、マスメディアにのって拡散します。

地道な探究を蓄積しても、見えてくる過去はわずかです。その際たとえば、シンドラが「彼にとつての過去」であるベートーヴェンをどう見ていたか、なども含めて、多層的な考察が必要です。過去を見る目も、立場や時代によって変わり、問いによって過去は、違う答えとなって現れます。大学で学ぶ、今後の社会を担う人々には、このような人文学のありようと意味を伝えることが必須です。



小岩 信治 Profile

一橋大学大学院 言語社会研究科・教授
東京藝術大学、ベルリン芸術大学で学び、初期ロマン派のピアノ協奏曲に関する研究で博士号(Dr. phil.)。
静岡文化芸術大学文化政策学部准教授を経て現職。
東京藝術大学音楽学部、東京大学文学部、明治学院大学文学部ほかで講師を歴任。

ピアノ・メーカーと呼ばれる人や企業は、どうやってピアノを作ってきたのか。この素朴な問いも、いつ誰に向けるかによってさまざまな答えに到ります。今日一般的なのは、それぞれのメーカー「のなか」で必要なさまざまな部品が作られ、つまり内製され、それらが組み立てられてピアノができる、というイメージでしょう。これが自動車なら少し違って、大企業「のそと」に集積する下請けメーカーの存在を想像できるかもしれません。IT機器の場合には、海外からの部品調達も珍しくないのでしょう。けれどもピアノの場合、大メーカーほど自社で部品を調達でき、だからこそ、部品やさまざまな素材のための「社外」の産業がメーカーと関係をどう築いてきたのかについては、ほぼ知られていないように思われます。

主要パーツを内製する今日の大メーカーのピアノ生産は、規模はまったく違うものの、ピアノ製造史の序盤と似ています。概ね18世紀とともに、イタリアのバルトルメオ・クリストフォリ(1655-1731)

がピアノ、すなわち「強弱表現つまりピアノとフォルテが可能なチェンバロ」を作り始めたとされています。クリストフォリが作ったのはもちろん、現代よりはるかに小ぶりな楽器でした。この基本的に木製の楽器を組み立てる職人は、同時にそこに組み込む部品の製作者で、部分から全体までがひとつの工房で生み出されました。

しかし産業革命と連動する近代社会はピアノ産業の姿も変えてゆきます。19世紀が三分の一ほど進むと、主にヴィーンにいたベートーヴェンやフランツ・シューベルト(1797-1828)が世を去り、ポーランドで生まれたフリデリク・ショパン(1810-49)、ヨーロッパ各地でやがて有名になるフランツ・リスト(1811-86)が、本格的な活動を始めます。その頃のピアノ音楽界では、楽器製作でも演奏でも、イギリス(またはフランス)と、ヴィーンのスタイルとが明確に区別され、ふたつの異なる文化として意識されていたようです。けれども同じ頃、ピアノ部品、たとえばアクション

の専門産業化が始まっています。パリでイギリス式ピアノを作っていたセバステイアン・エラール(1752-1831)による、ダブル・エスケープメント機構の特許取得(1821-22年)は、その意味で新たな時代を告げる象徴的なできごとでした。高品質の部品の安定的な生産によって可能になったのが、手工業から産業への転換、そして製品としてのピアノの大量生産でした。この大変動を経て世紀中盤以降、今やイギリス式が中心のピアノ産業を牽引したのが、アメリカ、そして世紀後半に統一を果たすドイツ(ブロイセン)です。こうして19世紀終盤のピアノは、一世紀前にヴィーンでヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-91)が使った楽器はもとより、半世紀前に晩年のベートーヴェンが接していたピアノとも大きく異なる、重厚長大な楽器として、音楽界に君臨しました。その時代をリードした音楽家はたとえばセルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)です。

ドイツの統一(1871年)と同時期に明治維新を迎えた日本でも、やがてピアノ製造が始まります。ここで注目したいのは、関係者が海外の情報から理解した当時のピアノ産業が、今日の大手メーカーとは違って、さまざまな部品を社外から調達して「組み立てる」産業だったはずだ、ということです。その世界では部分と全体の生産者・産地は必ずしも一致しません。再びIT機器の例をあげれば、チップセットやCPUと製品との関係と云えるでしょうか。ではたとえばフレームは、響板は、どこでどのように作られてきたのか、そしてそれらの調達方法は時とともにどう変化したのか、変わらなかったのか。これらの問いは、ピアノ生産の現場の方々には自明だったかもしれませんが、十分に解明されてはいません。

日本のピアノ製造初期を想像させる貴重な文化・産業遺産のひとつが、東京都港区重要文化財「日本楽器製造株式会社製初期グランドピアノ」(1903年)です。山葉寅楠(1851-1916)率いる日本楽器製造(以下、日楽)は1902年にグランド

ピアノの製造を開始、このピアノは翌年の第五回内国勸業博覧会に出品されたのち昭憲皇太后のお買上となりました。その製造にあたって、日本がピアノ産業の後進国だったからというよりむしろ世界の常識として、アクションは専門業者の製品が輸入されました。(実際、ピアノ部品の専門産業化・分業化は、有名大企業の生産効率化だけでなくピアノ製造への新規参入を促しました。)このピアノを含むグランドピアノの製造が始まったとき、当時51歳の山葉らとともに弱冠16歳の河合小市(1886-1955)が、海外から到着したばかりのグランドピアノ用のアクションを前にしていたはずだ。



河合小市(1886-1955)

河合について紹介する文章ではほぼ必ず、日楽で重用され、独立して1927年に河合楽器研究所、のちの河合楽器製作所(以下、河合楽器)を興した河合が、アクションの開発に優れていたことに言及があります。その実績は、一方で、独立後にアクションに関する特許をつぎつぎと取得したことで示されます。1928年以降、アップライト・ピアノのための「自在アクション」など、ピアノのアクションに関する河合の特許や実用新案は6件に到りました。他方で、時を遡って日楽時代、国産(アップライト)ピアノ誕生前夜の1899年、山葉の渡米中にアクションを発明した、と紹介されることがあります。そうした記述において、河合は河合楽器の創業者として描かれますから、一方で創業後の業績が、他方で若き「発明小市」の才能が目されることは驚くにあたりません。けれどもアクションに生涯関心を持ち続ける河合は、国産アップライト誕生後の日楽で、そして右記グランドピアノの製造現場で海外のアクションを目にしたあと、何をしていたのでしょうか。

現代の私たちには、河合の日楽での活躍が、日楽・河合楽器どちらの立場からも描かれにくかったことも容易に想像できません。それは日楽にとってライバル会社の創業者となった元社員の仕事であり、河合楽器にとってはそれより自社での功績をアピールすべきだからです。関係者にとつて都合が悪いために過去が消し去られた、と主張しようというのではありません。けれども、描かれる理由が関係者の誰にもなければ、重要な事実が忘れ去られていくことはあります。もちろんこの問いの解明は容易ではありません。ご存じのとおり日楽・河合楽器とも大戦の戦災を免れず、文書類ほか多くの歴史資料が失われました。

それにもかかわらず、歴史を見る過去の日線を検証と知の更新は可能です。みなさまはヤマハのウェブサイトの社史の説明で、有名な「寅楠の箱根越え」の記述が更新されていること、それが事実と断定されていないことに気づかれたでしょうか。またピアノ製造初期の基礎資料「直吉メモ」について、静岡文化芸術大学との協力のものと

最新の知見が公開されています。これらは、ヤマハがていねいな検証を積み重ねた成果であり、歴史に向き合うその真摯な態度は敬意に値します。

「日楽での河合小市」というテーマは、バラエティ番組での根柢の乏しいベートーヴェン逸話にくらべて、たいへん地味です。それは後世の人々が関心を向けにくく、結果としてスポットライトがあたらないままでした。歴史は、「何が書かれないか」も含めて、こうして後世の目線によって決まっています。けれどもこのテーマは、河合楽器とヤマハという本邦の二大ピアノメーカーにとって、ビジネスでの競合関係を超えて重要です。

今年2024年から5年間にわたり、6大学の研究者が参画し、河合楽器とヤマハ両社のご協力のもと、20世紀序盤の日本を含む東アジアのピアノ産業について調査・研究が行われています。
 (科) 研 費 24K00018 <https://kaken.ni.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-24K00018/>
 「日楽での河合小市」について、本稿では

問題の存在を指摘することしかできません。けれども歴史研究・産業・博物館などが連携して、数少ない貴重な現存楽器を調査し、また往時を知る方々に丁寧なインタビューを続けることで、その成果は両社社員のみならず広くピアノ産業・楽器産業に連なる誇りを感じる契機になり得ます。また、こうして時間をかけて検証される歴史研究は、一見「タイパ」が悪くても、先人の営みへの敬意を生み、それを知る喜びを人々に提供できるはずです。



上記研究プロジェクトでは、大正期までに本邦に存在したピアノについて調査しており、データベースの試用版 (https://www.gakkihakku.jp/piano_db/) を公開しております。情報提供にご協力いただける場合は一橋大学小岩信治研究室 s.k01wa@r.hit-u.ac.jp にご連絡をお願いいたします。



3人のコンサートチューナーとの思い出



日本ピアノ調律師協会／関東支部

吉川 満之

この冊子はご存知のように日本ピアノ調律師協会より発行されているものです。

これを手に取られた方はピアノ調律という仕事を理解されていて実際に調律師を自宅に呼んだり、コンサート、音楽教室等で調律師に会ったことがある方々だと思えます。私がこの仕事を始めた50年前は時々、調律師さん？調教師さん？などと呼ばれていました。しかし最近ではNHKテレビで「もう一つのシヨパンコンサート」と題したピアノコンクールの調律師を扱った番組が再放送されたり2016年の本屋大賞で「羊と鋼の森」という調律師が主人公の小説が大賞を受賞しその後、映画化されこの仕事の認知度は以前と比べ相当上がったと思います。

現在、調律師協会には国家認定資格を持った会員が約1900名在籍しています。その中にはホルルのコンサートの調律を中心に仕事をしている会員もいます。今回は言わば技術も人格もトップレベルの調律師について書きたいと思えます。自分自身で勝手に世界3大調律師と呼びご紹介したいと思えます。私は協会の役員を務めてきましたので3人の方々はかなり身近に関わることができました。

フランツ・モア氏

彼はニューヨークスタインウェイの調律師としてホロヴィッツ、グレングールド等の天才ピアニストの仕事を手がけそ

の業績は彼の著書「ピアノの巨匠たちと共に」に詳しく載っています。

彼は2022年に亡くなったのですがピアノ音楽雑誌「シヨパン」で彼の追悼特集もありました。彼は数回来日し日本人ピアノ技術者にレクチャーを持ちました。その中で私は彼をホテルに迎えに行ったり会場を案内したりするアテンド役でした。朝彼に会うと「ヨシー朝飯は食べたか？」と満面の笑みで迎えてくれました。3日間一緒にいたがいつも上機嫌でした。

アメリカのような広い国でビッグネームのピアニストの多くが彼を指名したということはピアノ技術は言うまでもなくその広い人間性が天才達を惹きつけたのではないのでしょうか。

ジョージ・アンマン氏

彼はハンブルグスタインウエイのスイス人調律師で年間250日以上海外で仕事をしていました。

15歳で中学校を卒業し同社に就職して21歳まで無給で働いたそうですが夜は音楽学校でピアノ演奏の勉強をさせてくれたそうです。その実力は一流ピアニストの連弾パートナーを務めるほどでした。彼の調律を見て驚いたことはユニゾンを合わせる時に基音に対して左右のどちらの弦が狂っているかミュートを使わずに判断できることでした。自分で試してみましたが全く分かりませんでした。また、日本人調律師に対するレクチャーの中で受講者に対し調律終了後に演奏してみることを求めました。それは単にオクターブ、ユニゾン等の正確さではなく音楽を表現する音に仕上がっているかとの問いかけでした。工具かばんも自分で作りエルメス(元は馬具メーカー)より材料を取り寄せまるで宝石箱のようでした。

彼と話をすると言葉に及ばず美術、ファッション等にも造詣が深く超一流は美に対する全てのことに精通しているのではないかと思いました。

辻 文明氏

彼はハンブルグヤマハの駐在員でしたが彼の作る音に氣に入ったピアニストの要望で数多くのスタインウエイをはじめとするコンサートピアノの調律を手がけてきました。特にヨーロッパを起點に活躍する日本人ピアニスト内田光子氏から絶大の信頼を得ていました。

マールボロ音楽祭をご存知でしょうか。毎年アメリカのバーモント州で行われている演奏家の教育を目的とするクラシックの音楽祭です。このイベントに彼は飛行機のファーストクラスチケットと共に招請されていました。このような厚遇を受けた調律師はあまりいないのではないのでしょうか。

辻氏とはIAPBT(国際ピアノ製造技

師調律師協会)カンザスシティ大会で一緒に絡したので尋ねたことがあります。「僕も辻さんのようになりたいのですがどうしたらいいですか」と「簡単だよ!まず美味しいものをたくさん食べる、良い音楽をたくさん聞く、そして素敵だと思った人たちとたくさん会うことだよ!」なんと楽しい答えでしょうか。

私はこのことを実践しつつこの仕事を続けています。

この3人に限らずこの業界では色々な意味で尊敬できる方々がたくさんいます。

整音(音色を揃える)の神様、修理の達人、修復のスペシャリスト、塗装名人、運送のエキスパート等。皆様揃ってこの仕事が好きでプロ根性に溢れています。特に当協会の調律師はピアノの音を聴くだけではなくお客様の声をしっかり聴き皆様に寄り添う調律師です。もし調律師をお探しでしたら是非、当協会員の中からお選びください。

ピアノライフの
ための
グッズ特集

ピアノライフを 楽しもう!!



大胆な鍵盤デザインが
ファッショナブル!

音楽のある生活をもっと身近に!!

音楽好きとしては、身につけているものや普段から使っているものにも、ちょっとした音楽要素を取り入れたいところ。音符のデザインが入ったハンカチや、鍵盤がカジュアルな雰囲気にデザインされたトートバッグなど、身に付けたり持ち歩いているだけで日常が楽しくなりそうなグッズがたくさん!大人から子どもまで使えるステーションナリーは、自分だけでなく、プレゼントにもぴったりです。仕事もプライベートも大好きな音楽に包まれて素敵な1日になりそう!

・問い合わせ先 21ページの株式会社吉澤まで



ピアノ椅子も 好みで選ぼう!!

そんなリクエストに応じてくれるのがピアノ椅子のセミオーダーシステム。色、座面、脚の形状、ハンドルをお好みの組み合わせにカスタマイズでき、その組み合わせは何と1万通り以上。これだけあればあなたの好みのピアノ椅子がきっとみつかるでしょう。基本的には用意されている中から各パーツを選んでカスタマイズするのですが、それ以外のリクエストも可能な限り対応しています。例えば、「脚の長さを少し短くしたい」「本革張りにしたい」といったリクエストにもお応えしたこともあります。MODERATOタイプの座はチップウレタンをベースにした仕様のため、おしりを安定して支えてくれるのもうれしいポイント。自分だけのピアノ椅子を手に入れたいならこのセミオーダーシステムはとても便利♪



小さなピアニストのための アシストグッズ!!

いいもの見つけた!

足元をささえるピアノ足台なども、小さなピアニストのピアノライフをささえる大切なレッスングッズの1つです。足が宙に浮いた状態では重心が不安定となり、正しい姿勢で演奏ができなくなってしまいます。まだペダルまで足が届かない小さなお子様には専用の足台を使うことで、小さいうちから正しい姿勢で練習ができるようになります。ペダル付きのモデルを使用することで、ペダルを使った演奏も可能になり、音楽の表現幅が広がります。小さなピアニストにとってもピアノライフが楽しくなりそう♪



右側専用!
この補助ペダルも!



第1回

ストリートピアノ

石川県
加賀市



場所

〒 922-0811
石川県加賀市熊坂町二 5-1
NPO 法人歴町センター大聖寺

☎ 0761-75-7700 fax 0761-75-7700
旧 JR 大聖寺駅隣りの元ホテル建物内
(歴町センタービル) に設置されています。
9 時～ 16 時 水曜定休日
入場無料で誰でも弾くことができます。

ピアノの種類：ヤマハグランドピアノ NO.G-2

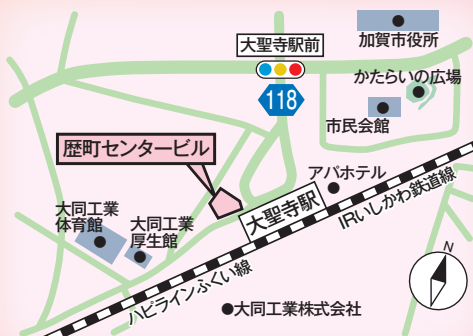
※ 現代とは異なる昔のヤマハグランドピアノの特徴を
随所に見つけられます



石川県の最南西に位置する加賀市大聖寺地区は、かつて加賀百万石の支藩として栄え、中でも大聖寺十万石の城下町として栄えた行政の中心地でした。

70 余りあった町名も明治以降も殆どが統合されず現存していますが、幾度かの災害や太平洋戦争などを経る間に町並みや文化遺産は減り続け、今ではごく僅かに残る程度となってしまいました。

NPO 法人歴町センター大聖寺は貴重な歴史的景観を守り整備することで、生活する住民や次世代の子供達が誇りをもって暮らせるように応援する団体です。その活動の中で 2021 年 11 月より無人化された駅周辺の賑わい創出の一環として設置されたのがこのピアノです。



新潟県 上越市



〒 943-0861
新潟県上越市大和 2 丁目 1-1
JR 東日本 北陸新幹線上越
妙高駅西口 光のテラス

ヤマハグランドピアノ C5X



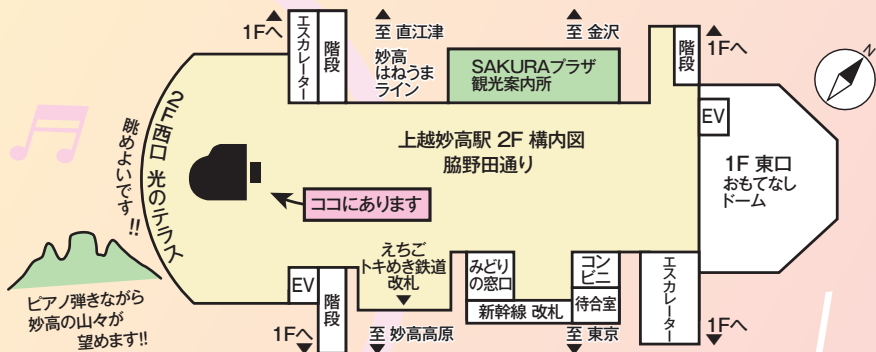
今年、世界文化遺産に登録された「佐渡島の金山」に渡る西の航路の玄関口、直江津港の新幹線最寄り駅です。また、春は日本三大夜桜で名高い「高田城址公園」、冬はウィンタースポーツのメッカ「妙高高原」の最寄り新幹線駅でもあります。

現在の駅ピアノは 2 代目です。この場所にはこれまでもアップライトピアノが設置されていましたが、響板などが傷んだため撤去されてしまいました。

こうした中、駅ピアノが無くなったことを知った上越妙高駅近くの齊藤商事の 故 齊藤義輝代表取締役会長が「もっと明るく、華やかに、人がいっぱい集まるような駅になって、大勢の人に弾いてもらって楽しんでもらえば…」という思いから自腹でピアノを購入、再び駅ピアノが設置されました。

光のテラスはガラス張りで開放感があり、妙高戸隠連山国立公園の季節ごとの絶景を眺めながら楽しそうにピアノを弾く観光客や帰省客が多く見受けられます。

始発から終電時間までどなたでも無料でご自由に演奏ができます。ただ、構内アナウンスが流れている時は演奏を一時お控えくださいとのことです。



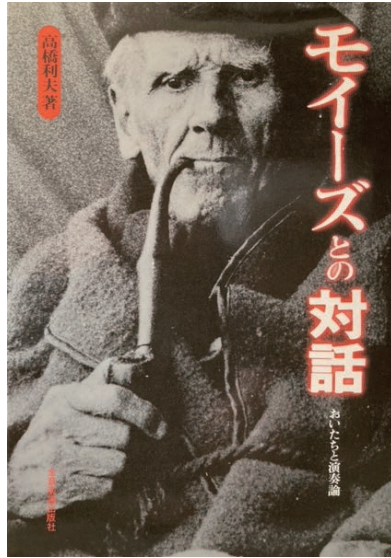


調律師も気になる本

「モイーズとの対話」

おいたちと演奏論

高橋利夫 著
全音楽譜出版社



日本ピアノ調律師協会
九州支部
足立 修治



ずいぶん前の話になりますが、神保町の古本屋さんに立ち寄った際に、ずらり並ぶ本を見ていて、ふと、ある本の帯に「フルート愛好家のバイブル」と書かれてあるのが目に止まりました。そう言えば、自分が最初に音楽で涙したのはフルートによる演奏だった…と瞬時に思い出しその本を手にとったのです。そして、ちょっとページをめくると、「フルートの神」という文字が目に入りました。

よし、買ってみよう…。

この本は一音楽家の金言集であります。著者でフルーティストでもある高橋利夫氏が、実際にマルセル・モイーズから得た言葉の数々を紹介しているわけですが、それが、まるで目の前で話されているかのように聞こえてきて、背筋が伸びて、

そして、それをいつまでも自分の中でも大切にしておきたいと思う、そんな本です。

まず、自分が、この本を購入したきっかけは何かを少し思い出してみます。

さて、この本、どうやら1970年代始め頃に書かれたちよつと古い本のようなのですが、私が購入した時点ですでに第十一版発行とありますから、かなりの人気の本だったと想像します。おそらく、

音楽する多くの人たちに読まれたに違いありません。

まず、はしがきの中で、「偉大な人間は近くでは極く平凡な人間に見える。この平凡に見えさせるものは、計り知れない大きな人間愛であると思う。」という著者の言葉に目が止まります。何何の神と言われる人はそうなのかと既に論された気分にもなりながら…。

「モイーズからの手紙」の紹介、そして、幾人かの当時その世界では有名だったと思われる方々からの感慨深いメッセージも頂きながら、段々と本編へと入ってゆきます。

ここからはもう、高橋氏の一つ一つの質問に対して、息つく間もないほどに、まるで湧き出る泉のように次から次へと演奏家マルセル・モイーズの名言が出てきます。

作曲家に対する尊敬の念というものを常に感じさせながら、時にその強い音楽

愛からか、演奏をされる方々には少し耳の痛いお話もあるかもしれません。

一つ、私のように調律師として音楽の世界に関わっている者として、なるほど西洋の演奏家さんというのは、こうした気持ちで普段からいらっしやるのかと勉強になった部分があります。

「…作曲家と演奏家と聴衆との関係は、まず、キリストと牧師と信者との関係に似ているだろう…。牧師がキリスト自身であるような錯覚を起こしたらどういうことになるか考えてみれば分かる…。キリストも大作曲家達も神の声を直接聞くことができた人間だ。…」

この例え、そしてそのあとにつづく演奏家の立場というものの説明は見事で、この本を読み終えて、何年経っても忘れられない言葉となっております。

また、「音楽的良心」に触れる部分や、「音楽性」といった言葉の説明の部分も忘れられません。特に、後者の、「…音楽性」といってもそれはつまり音楽における芸術性をいうのである。芸術性というもの

をつきつめていくと、その根底にあるのは人間性であるのが分かる。…」には、共感を飛び越して、どれだけ追求しても届かないものを示されたようにも思う一方で、せめて、方向を見失わないために心に留めておかなければならない大切な言葉ではないかと考えさせられます。

というのも、一見、調律師には何の関係もないと思われる言葉かもしれませんが、調律師として「音楽性」が全くのゼロでは仕事は成り立たないだろうと考えた場合に、この言葉はきつと活きてくるはずなのです。

読者の期待に応えるかのように、この本の最後にはデイスコグラフィーが掲載されています。もちろん当時はレコードの時代です…。

なんらかの形でその音源を手にすることができたなら、言葉との一致、或いはそれ以上のものを私たちは得られるかもしれません。





ペットとピアノ

静岡県浜松市



猫（匿名希望 性別不明です）

調律に何うと、最初は少し離れた所で興味深そうに様子見しているのは猫特有。雰囲気慣れてくると、段々と距離を縮めて近づいてきます。調律を開始してしばらく経つと、今度は動くハンマーに興味津々でピアノの上に乗って遊び始めてしまいました！手元では鍵盤も動いているのでそちらも気になっています！！

こちらとしては作業が進まず、音出ししているだけで猫が遊んでくるのでしばし一緒に遊んでみることにしました。私も大の猫好き。まだ若くて遊びたい盛りの猫が家族以外の私にも心を開いてくれることも嬉しく思いながら。

調律が終わってお客様と話していると、また近づいてきて何と膝の上に乗ってきました。お客様のお宅の猫ちゃんにたっぷり癒されておいとましました。





4月4日はピアノ調律の日

お元気ですか、あなたのピアノ。

2011年度よりピアノ調律職種に国家資格制度が
導入されています。

ピアノの調律は、厳正な技術審査を経て入会した
日本ピアノ調律師協会会員にお任せください。

日本ピアノ調律師協会は、わが国の音楽文化の発展に寄与
することを目的として、さまざまな事業を行っています。



令和6年10月30日発行

編集・発行 一般社団法人 日本ピアノ調律師協会
〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-18-21 楽器会館 5階
TEL.03-3255-3897 FAX.03-3255-9246 E-mail. info@jpta.org
本文編集 中部印刷株式会社

編集後記

オトノトビラは、ピアノライフをより楽しんでいただけるようにと一般社団法人日本ピアノ調律師協会の会員が制作しております。協会会員は日々、よりよいピアノ技術を皆さまにご提供できるように活動しております。読者のみなさまには、このオトノトビラを通して私達調律師と共にピアノライフを楽しんでいただければと思います。発行にあたり、ご協力をいただきました皆さまに感謝を申し上げます。

広報局 吉川武文

読者さまからの投稿募集

オトノトビラでは、読者のみなさまからの
ピアノに関する投稿を
お待ちしております。

- 私流ピアノの楽しみ方・ストリートピアノ体験記
- ペットとピアノのエピソード・珍しいピアノを見つけました
- 他、こんな記事が読みたいなどのご希望
文章と、写真やイラストを下記まで送信してください

郵送は受け付けておりませんのでメールでお願いいたします

送付先（オトノトビラ係） | kouhou2024@jpta.org

※投稿いただいた原稿は将来的に協会発行物、
ホームページ等に掲載されることがありますので、このことをご承諾の上ご投稿ください



一般社団法人 **日本ピアノ調律師協会**
Japan Piano Technicians Association

HP <https://www.jpta.org>

E-mail info@jpta.org